

フクイアナバチについて

常 木 勝 次
福井大学生物学研究室

On *Sphex* (s. str.) *fukuianus* sp. nov. found in Japan
(Hymen., Sphecidae)

By Katsuji Tsuneki

1953年8月8日、筆者は福井県大野郡水無山の麓において採集中、今まで全く見かけたことのないアナバチの、1♀4♂♂を網に入れた。帰来して早速安松博士の旧日本領土産 *Sphex* の Monograph を参照してみたが、これには該当する記載を発見することはできなかった。その後同所附近の九頭竜川沿岸のノブドウの花上で数頭の♀を見かけた。越えて9月9日には、水無山東方の谷間で、偶然にもこの種の営巣場を発見した。そこで Kohl のこの属に関する Monograph の key を辿ってみたところ、本種は 1883 年に, Mocsáry によつて記載された *S. luteipennis* という種と極めてよく一致することを知つた。更に Bingham (1898) をも参照し、多少の差はあるが、せいぜい亜種的關係くらいに思われたので、丁度執筆していた“福井県採蜂記”(はち9号)の中にこの種名の下に本種について一寸ふれておいた。その後県東部の山間地帯から更に十余頭の標本が採集されたので、習性に関する記録をしておく必要もあり、本種の分類学的検討を詳細に行つたところ、これは *luteipennis* の亜種とするよりは、むしろ独立種としておくべきものであるという確信をもつに至つたので、以下に本種の記載をし、その紹介を行うことにした。

Sphex (s. str.) *fukuianus* sp. nov.

Amongst the members of the genus *Sphex* Linné hitherto described, the present species is most closely allied to *S.* (s. str.) *luteipennis* Mocsáry, 1883 and may have a close phylogenetic relationship with it. Indeed, according to the Kohl's key in his "Monographie der natürlichen Gattung *Sphex* Linné (sens. lat.)" (Ann. k. k. naturhist. Hofmus., Bd. V, Heft 2, 1890) this species runs straight to *luteipennis* known from North Africa and South and South-eastern Asia. Detailed comparison with the descriptions of this species (Kohl, Ibid., Heft 3, S. 423; Bingham, Faun. Brit. India, Hym., Vol. 1, p. 247, 1898), however, revealed that it differs from *luteipennis* in some important characters which seem to merit the separation of both the species at the specific rank. The differences are as follows:

1) Anterior margin of clypeus roundly produced and with bilobate porrection in the middle, the surface medianly obtusely carinated, the carina ends in a sub-tuberculate swelling slightly before the upper margin, not shallowly grooved at the anterior half (♀).

2) The length of antennal segments 2 and 3 taken together is slightly less than the length of 4 and 5 combined (ratio 17:15) (not only in ♀, but also in ♂).

3) Propodeum covered with long greyish white pubescence (not with black hairs) which appears somewhat yellowish at the base (♀, ♂).

4) Pectinal stiff hairs at the outer margin of front metatarsi are only 8 in number, not 10 (♀).

5) Wings much darker, rather fulvo-fuscos, with outer margins broadly, more deeply infuscated (♀), in the male simply fusco-hyaline.

In addition, among the incomparable characters are:

Labrum (♀): Fig. 1. Clypeus and face (♂), beside black and long hairs, with very short appressed silvery pubescence and well glittering in certain light. Pronotum, sides and posterior margin of mesonotum (♀ ♂) adorned with short appressed silvery pubescence. On thorax (♂) blackish hairs are mixed with brownish grey ones, so that the sides appear rather greyish from above. The pectinate stiff hairs at the outer margin of fore metatarsi are about one-third the length of the segment. Length ♀ 24-28, ♂ 22-25 mm.

Holotype: ♀, Fukui Pref. (Yashirodani), 2. IX. 1956 (K. Tsuneki leg.).

Allotype: ♂, Fukui Pref. (Hosonoguchi), 8. VIII. 1953 (K. Tsuneki leg.).

Paratypes: 6 ♂♂, Fukui Pref. (Katsuyama, Ohno), 8. VIII. 1953, 26. VII, 1, VIII. 1956 (K. T. leg.); 12 ♀♀, the same places, 8. VIII, 9. IX. 1953, 11, 20. IX. 1954, 17. IX. 1955 (K. T. leg.).

Distribution: Japan.

さて、日本の昆虫相の研究はまだ極めて不十分であつて、素木先生の御話(1954年日本動物学会大会, 分類学部会シンポジウム)によれば、今までに記録された種は、現実に在るものの半分にも達しないだろうということである。たしかに そうに違いないと思われるのであるが、しかしそうは言つても、日本でも大形の種類は大体調べが届いているのであつて、もしまだ記録されていないものがあるとしても、そういうものがあるという事実は、同好者の間には大い知られているのが一般であり、ただ 分類学的研究が正式に行われていないというだけのことが多いのである。全く未知のまま残されている多数の種は、大体小型乃至微小昆虫であつて、大形のものが誰の眼にも触れずにいるという場合は極めて稀である。ところが、ここに記録するフクイアナバチは、その極めて稀な場合の一つであつて、少し大げさに言えば、オカピがコンゴ地方から発見された場合に幾らか似ていないでもない。

それは日本のアナバチの中ではキンモウアナバチに次ぐ大形種でありながら、未だ嘗て誰のコレクションの中にも置かれたことがない(?)のである。恐らくこれは日本における relics の一つであつて、信心深い北陸人が自然に手を触れずにおいたために、幸運にも保存されたものであらうと思われる。

本種は、既述の如く Egypt から India, 東南アジア地方に分布する *luteipennis* に最も近縁であり、また同様な分布をし、更に中国まで北進している *nigripes* Smith という種ともかなり近い形態的特徴をもつている(但し *nigripes* とは生毛状態では全く異なる)。恐らくこれらの種と共に分化したものが日本に入りこみ、その後次第に衰微して現在 relics

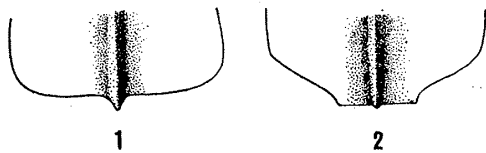
的存在となつて残つているものであろう。この種がハネナンコロギス* *Eremus testaceus* Matsumura et Shiraki という余り普通でない種を狩る習性(別報)からみても、これが余り発展の余地のない group に入ることは確実である。安松博士の Monograph から洩れたことも、この種が余程の珍種に属し、しかもその分布が極めて限られていることを物語つているように思う。福井県における分布をみても、産地は限られているようであり、それらの地でも、その数はクロアナバチ *S. umbrosus* Christ などに比べて遙かに少なく、少し乱獲すれば、たちまち絶滅することが予想されるような状態にある。本種の ♂ は 7 月の下旬から現われ、♀ は 8 月から 9 月にかけて活動する。その採集地は上掲の他に岩屋、小和清水の記録があり、いずれも九頭竜川の本流乃至主要支流に沿つている場所である。

フクイアナバチは上述のように relicts 的存在として興味のある種と考えられるが、実際には、もつと広く日本の諸地方にもおるのかも知れない。ただ、その形態的特徴が一見普通種のクロアナバチと似ているところから、採集者の眼を免かれ、或は採集されても、クロアナバチの変異くらいに誤認されているかも知れない、とも思われる。そこで同好の方々には、標本箱をもう一度調べて頂いたり、或は今後採集の際に注意して頂く際の参考資料となるように、以下にクロアナバチとの違いを記しておこう。

Sphex umbrosus Christ との違い

(A) ♀ (触角 12 節, 可視腹節 6)

- 1) 翅の色が遙かに黒く、全体黒ずんだ黄褐色である。先端部は中広く一層黒く曇つている。
- 2) 頭、胸部の毛は黒く、顔面にも銀白毛は全くない。この為め頭楯等の点刻がよく見える。前胸背と中胸背両側縁及び後縁に短い銀白毛が密着し、方向により銀色に光る。前伸腹節の毛だけが灰白色でクロアナバチに似るが、よく検すると本種では毛の基部が少しく黄色がかつている。胸部下面には多少褐色がかつた短毛が密生している。以上の生毛状態のため、一見した時、全体がクロアナバチに比して遙かに漆黒に見える。
- 3) 後胸背中央部はわずかに膨らみ、その正中線は極めて浅く凹む。クロアナバチでは、ここは相接した双峯状に膨隆している。
- 4) 両眼内縁線は顔面部で完全に平行し(クロアナバチでは少し下方に向つて狭くなる)、上端近く急に狭まるため、両眼間の距離は頭頂部において頭楯におけるより明らかに狭い(クロアナバチでは頭頂部の収斂度が小さいため、上下における距離はほぼ同様である)。



Figs. 1 & 2. Labrum.

1, *S. fukuianus* n. sp. 2, *S. umbrosus* Christ.

その他、頭楯前縁中央部の形状、触角第 3 節の先端への太まり工合、上唇の形(第 1 図)、腹柄と第 2 後付節(又は第 3 触角節)、及び第 3 後付節との長さの比、第 1 前付節の櫛状剛毛と同節との長さの比などにおいても、両者の差が認められる。

* 素木得一博士御同定。この機会に御礼申上げる。

(B) ♂ (触角 13 節, 可視腹節 7)

- 1) 翅は一樣に黒ずみ, 特に先端部は巾広くより強く曇る. 黄色味は殆んどない.
 - 2) 頭, 胸部は一見したところ黒く見える (クロアナバチでは灰色で周囲が白つぼく見える).
 - 3) 顔面及び頭楯は一見黒で, 黒い長毛が生えている. しかし地肌に接して極めて短く細い銀白毛が密着し, 見る方向によつて強く光る. (クロアナバチでは長い銀白毛が密生している). 胸部には黒毛に混じて灰褐色の毛があり, 背面から見ると胸側部はいくらか, 褐色がかつた灰色に見える. 前胸背と, 中胸背の両側及び後縁の短銀白毛, 前伸腹節の毛は♀の場合と同じ.
 - 4) 両眼内縁線の状態は, 共にクロアナバチ♀のそれに似ている.
 - 5) 後胸背中央部の状態は♀の場合と同様の違いがある.
- その他, 第1前付節とその櫛毛との長さ関係, 第7, 第8腹節下面に長軟毛が密生すること, 触角第3節の特徴などがクロアナバチと異なる.

オオオサムシの分布東限

黒 沢 良 彦

オオオサムシ *Carabus (Apotomopterus) dehaanii* Chaudoir は関西地方から西の地方では比較的普通に見られる種類で, その分布の東限は, 従来の記録によれば, 岐阜県西部から鈴鹿山脈に沿う山地帯であり, これから東の濃尾平野をへだてた山地には, 私の知る限りでは, 全く記録がなく, 完全に西日本特産の種類と考えられて来た. 然し, 昨年国立科学博物館に収められた故鹿野忠雄氏の蒐集品の中に「駒ヶ岳黒川, 3. VIII. 1929」と云うラベルを附した本種1♂があり, 私も以前に愛知県岡崎市附近産の本種を見た記憶があるので, 本種が少くとも岐阜県中部の低山地帯を経て愛知県東部及び長野県西南部の山地にまで分布して居るのではないかと私は考えていた. ところが本年(1956)夏, 意外にも本種が山梨県北部で発見され, 遂にその分布は関東地方近辺にまで及ぶことになった. 即ちその詳細は次の通りである.

1 ♀, 山梨県甲府市昇仙峡, 24. VII. 1956, 坂本英次採集, 国立科学博物館所蔵.

採集者坂本英次氏のお話によれば, この標本は昇仙峡の裏山の中腹の道路を横断したものを採集されたとのことである. 唯1頭の雌である為詳しい比較は出来ないが, この標本に関する限り, 関西地方産のものに比し, 著しく黒味が強く, 翅端に近い段状のえぐれがやや強く顕著な点が異なる.

なお本年はこの他に南アルプス地方の数ヶ所で本種が発見されているので, 中央アルプス及び南アルプスにも広く本種が分布していることが推定される. 之等の産地については近く西川協一氏によつて詳しく報告されるであろう. 又山梨県の北部及び東部に於ける本種の分布もやはり西川氏等によつて詳しく調査されることになっているのでその結果を期待したい.

最後に貴重な標本を寄贈された坂本英次氏に深く感謝する.